

文献紹介

社会科学と歯科医学

歯科医学と社会科学の重なりあう領域についての系統的な文献紹介である。クリティカルとあるのは、紹介者の評価をかなり前面に出そうという意味である。もう10年も前の刊行でいささか古いと思われるが、この領域の草創期の業績であり、古典的ともいえるものであるだけに重要である。1966年にテル・アビブで国際歯科医学連合の歯科医療委員会が“歯科医学と社会科学”という部会が開設し歯科に関する大衆の態度、そして歯科医療担当者の態度に影響を及ぼす社会的因子についての研究のとりくみを行うことになった。このためには歯科医と社会学者、行動科学者の共同研究がそのいずれにとっても有益であり、かつ必要であることが認識されたが、これまでどのような研究がなされているのが明らかにされていなければ今後どう取りくんでよいかも判らない。という次第で、手分けして論文の収集と紹介をすることになった。その成果が本書である。

章立ては次のとおり。

- 1 序論
- 2 歯科医学生の社会科学研究
- 3 歯科医学教育における社会科学的技法
- 4 歯科医学生が歯学校で良い成績をとれるかどうかの予測に関すること

- 5 歯科医療のマンパワーと制度としての歯科医療
- 6 歯科医療の特徴
- 7 歯科医師の生涯教育
- 8 歯科医 - 患者関係
- 9 歯科医療サービスの利用
- 10 成人の歯科衛生教育
- 11 学校歯科衛生教育
- 12 歯科疫学における社会的因子
- 13 社会学者によるフッ素塗布問題研究
- 14 歯科医学における社会学者の役割
- 15 後書き

それぞれ 150～200 編ほどの論文のレビューなので、さらにそれを要約するのは困難だが、興味のあるところをつまみ食いで紹介すると、1～5までは、歯科医学教育に関する社会学および行動科学的研究で、どのような動機で歯科医を志望したか、入試選択の方法、とくにこの方面でつかえる評価尺度の紹介とそれらを用いての調査報告成果をまとめている。歯科医学教育における患者への態度分類として Ouadrantelli の設定したものは面白い。

① 道具主義者（患者は教材とみる。大学病院にくる患者は当然、それを承知し、教育に協力すべきだとみる）、②人道主義者（患者中心主義）、③技術者（歯科の技法に関心が集中する。患者はその技法を証明するものとみる）、④科学者（歯科学に関心を集中し、患者はそのような問題をもつものとみる）。の4つである。これらは歯科医志望の動機づけと深くかかわっているという。

5のマンパワーの問題は、そもそも歯科医はどれほど必要かという問題をめぐっての調査である。とくに歯科医の補助員をどう組みこむかも議論が沸いた頃であるので、この基礎となる調査の紹介である。歯科医のタイプとしては Hall の5つの分類が注目されているが、それは、①プロフェッション志向（歯科医の繁栄を主な関心とする）、②企業志向（企業としての歯科医業が主な関

心), ③患者志向, ④ルーティン志向 (惰性的に診療する), ⑤辺縁的診療 (これに2種類ある。一つは, 開業したてと廃業間近の歯科医のライフサイクルの始めと終り。もう一つは, 全くはやらない歯科医)。カナダのサンプルでは, それぞれ①11%, ②12%, ③32%, ④26%, ⑤19%だそうである。

6は主としてアメリカ, カナダ歯科医師会が調査した歯科診療の社会学的データのまとめと, とくにグループ・プラクティスの実態, 歯科補助員の身分, 訓練, 有効性についてまとめたもの。

7は歯科医の生涯教育のニーズと方法に関する研究の紹介, 8は歯科医-患者関係の研究である。成人患者に関するものより, 小児に関するものが多く, この段階では, まだ, 個人的印象による論文が多かったが, 次第に実証的な調査も増えているという。

9以下は, 利用者側の問題についての研究紹介である。歯科サービスの利用度と, それを規制する変数, それに基づくタイプやモデルの提案, 患者教育の方法と有効性について, フッ素塗布や上水道への混入についての意見とそれにかかわる変数など。70年ころまでの業績だが, 歯科に関する社会科学や行動科学の鳥瞰を得て問題の所在を知るのには適当である。

(国際歯科医学連合刊/N. O. Richards and L. K. Cohen eds.: Social Sciences and Dentistry; A critical bibliography, Vol. 1 1971, Fédération Dentaire Internationale. International Quintessence Publishing Group, Berlin-Chicago-Tokyo-Rio de Janeiro)

(中川 米造/記)

老人の精神的混乱に対する看護婦の知覚：
居住者と場の特性の影響

厳格な医学モデルは, 医学上の判断に社会的要因の影響について考慮を許さない。もし社会的な状況において患者の社会的特性と相違が医学上の判断に強

い影響を与えるとするならば、医学モデルにこれらの要因を包括することは、その効果を増強するものである。この疑問に答えるために、英国の12の老人ホームに居住する415人の老人を対象に調査を行った。老人の精神的混乱の程度を比較するため一連の階層的退行を測定するスケールを用いた。精神的混乱の程度は次の観点から行った。(1)患者の医学的特性、(2)患者の社会的特性、(3)各老人ホームの相違。この調査研究の結果、症状の知覚には症状そのものの解釈よりも社会的要因の影響が顕著にみられ、その影響は個人レベルの社会的要因というよりも、老人の居住するホームの変数に基づいていた。

(Morgan. D. L.: Nurse's Perceptions of Mental Confusion in the Elderly: Influence of Resident and Setting Characteristics, *Journal of Health and Social Behavior*, 1985, Vol. 26 (June): 102~112.)



重要な生活上の出来事に伴って保有する ソーシャルサポートの緩衝効果



この研究は、個人が体験する最も深刻な生活上の出来事を明らかにし、そして、その出来事の間、もしくは、その出来事後、支援を受けた人の特徴を探索することにより、ソーシャルサポートの緩衝効果を検討したものである。社会資源理論を用い、社会的連携の強さ、自我と支援者間でみられる共通する特徴について研究上の操作を行った。個人にとって最も深刻であるが最も望ましくないと思われる一つの生活上の出来事は、ストレス-疾病関係に象徴されるものかどうかをテストするために仮設がたてられた。もし個人が最も深刻で最も望ましくない出来事を体験すると、かなりひどい抑鬱的症状の出現がみられたが、社会的連携の強いところから支援があると、その抑鬱的症状の緩和がみられることが明らかとなった。婚姻上の障害(最近の別居や死別等)を体験したばかりの人は、しかしながら、その援助の出所にかかわらず支援はそれほどの効果はみられなかった。被援助と援助者の間の年齢と教育の類似性が、既婚

者の抑鬱症状を和らげ、そして職業上の類似性は未婚者に同じような効果がみられた。緩衝効果をさぐるため、ソーシャルサポートの実際的な定義の確立に向け、これらの研究結果のもつ意義の重要性について論議した。

(Nan, L. Woelfel., M. W., and S. Light : The Buffering Effects of Social Subsequent to an Important Life Event, *Journal of Health and Social Behavior*, 1985, Vol. 26 (September) : 247-263)

|||||

医師により話された患者の理解度の 選定に対する新しいアプローチ

|||||

医師の診察 (medical consultation) から患者が理解するのは何か、そしてその理解の過程はどのようなものかなどは、臨床上也理論上也非常に興味ある事柄である。患者の理解度に関する実験的研究は非常に制約されてきた。しかしながら医学的コンサルテーションについての社会学的・社会人類学的理論の深淵さと複雑さを考慮すると、その測定法は適切であるとはいえない。その結果、社会学的・社会人類学的理論は臨床への適用に問題があると考えられてきた。

医学的コンサルテーションから患者が把握することが期待されている一般的な情報の定義と患者の3つの理解度レベルの査定を行う第三者的方法を開発した。この方法は医師が実際患者に話した内容とその意味することについての判断を包括している。このような方法は、特定の価値観とのかかわりが避けられず、またその方法に含蓄的な要素があるときには、妥当性という問題が生じてくる。そこでこの研究の新しいアプローチは信頼できるもとで行われたという証拠が提示されている。さらに、この研究で記述した方法は、患者の関心度によるグループの識別と予期できる結果を呈示し、また、医学的コンサルテーションでの患者の認知力の決定要因について理解力を深める助けとなるものである。

(Tuckett, D. A., Boulton, M., & C. Olson : A New Approach to the Measurement of Patients, Understanding of What They are Told in Medical Consultations, *Journal of Health and Social Behavior*, 1985. Vol. 26 (March) : 27-38.)

思春期の発達と友人：青少年の性的行動についての生物的・社会的説明

アメリカ合衆国の十代の白人を対象に情報を収集・分析した結果、青少年にみられる高まってくる性的動機は、両性とも思春期にみられる発達レベルと親友との性的なかかわりに関連していることが明らかとなった。思春期にみられる発達の効果は、社会的動機づけと生物的動機（リビドー）づけの二つの観点から分析された。生物的・社会的モデルは思春期の発達と友人の行動を同時に考えていくことが、別個にその効果を調べるより、より明確な相違の過程を呈示するものであることを示していた。

(Smith E. D., Udry J. R., & N. M. Morris : Pubertal Development and Friends : A Biosocial Explanation of Adolescent Sexual Behavior, *Journal of Health and Social Behavior*, 1985, Vol. 26 (September): 183-192.)

アルコール消費にみられるストレス緩衝特性：都市化と宗教的同一化の役割

田舎の住民を対象にした既存の研究は、生活上の出来事は禁酒者と多量飲酒者との間に抑鬱症状に関して最も強い関連が、中程度の飲酒者との間には強い関連がみられることを示していた。中程度のアルコール飲酒のもつストレス緩衝特性の可能性を一般化するために、テネシー州の九つの郡の554人の白人

居住者，テネシー州の首都，ナッシュビルに住む 314 人の白人と 306 人の黒人を対象に調査し評価した。典型的なアルコール飲酒量と飲酒頻度についての情報が，禁酒者，ときたまの飲酒者，中程度の飲酒者，多量飲酒者を分類するために，調査対象者に求められた。出来事 - 飲酒という相互作用パターンは田舎に居住する対象者にのみ有意にみられた。都会に住む黒人飲酒者には，生活上の出来事と抑鬱的症狀との間に一貫した関連がみられたが，都会に住む白人には飲酒はある主の種の緩衝効果を示す証拠がみとめられた。宗教への同一化と使命感を有するグループとの比較では，田舎の地域社会では，飲酒との関連では何ら特定の緩衝効果は見られなかった。

(Neff J. S. & B. A. Husaini : Stress-Buffer Properties of Alcohol Consumption : The Rolf of Urbanicity and Religious Identification, *Journal of Health and Social Behavior*, 1985. Vol. 26 (September): 207-222.)

(稲岡 文昭/記)
